

氏 名	<b>松村 浩之 (マツムラ ヒロユキ)</b>		
学 位 の 種 類	博 士 (芸 術)		
学 位 記 番 号	甲第 45 号		
学 位 授 与 日	平成 24 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論 文 題 目	<b>人体表現と自画像 ～理想と現実あるいは苦悩の超克～</b>		
審 査 委 員	主査 教 授	中 村 隆 夫	
	副査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 教 授	大 津 英 敏	
	副査 東京都現代美術館 主任学芸員	関 直 子	

## 内 容 の 要 旨

私は「自画像」を描くことで自らと対峙し、自らの本質を探ろうとしている。しかし自らを深く掘り下げていくと、日常意識していない、もしくは意識したくない自分の弱さに出会わざるを得ない。自画像を描くことで、私の心の問題が浮き彫りになってしまうため、私にとって絵を描く行為は非常に重たいものとなる。

絵を描かなければ楽になるのかというところではない。絵を描くことによるのみ、自らの苦悩と戦うことができるからである。その弱さに耐えるために、それを乗り越えてゆくために、私は理想像としての「筋肉」を描き出す。自画像に理想的な筋肉を纏わせ、理想的世界を描き出すことが、現実を雄々しく生きるための原動力となるのである。自らの苦悩を見つめ、絵を描くことによって克服していくことが私のライフワークだといえるのかもしれない。

本研究は、苦悩の超克という観点から、苦悩を抱えそれを直視した作家の作品を論じ、私の絵の原点を探り、今後の制作に生かしていくことを目的とする。

第 1 章では人体表現について考察する。特に苦悩を伝え、苦悩と格闘している筋肉表現について考えを進める。彫刻作品《ラオコオン》、ミケランジェロの《奴隷》、ロダンの《考える人》を中心に、肉体的な力と精神的な力との関係性及び人間の苦悩とは何かということを考える。

次に、私と同質の苦悩をもち、漫画という分かりやすい表現で苦悩を乗り越えていった『北斗の拳』、『タイガーマスク』について考察し、実在のプロレスラーである「タイガーマスク」について考えを進めることによって、私の苦悩と憧憬や願望を解き明かしてゆく。

第 2 章では自画像について考察する。自らの苦悩と対峙し、私にとってより良く生きよ

うとする意志が込められていると考えられる作家、レンブラントとシーレの自画像に注目して論考を進める。

鏡に映ったもう一人の自分の姿を、魂の現れとして捉えることは古来よりあった。自画像とは、自己の肖像画である。そして自画像を描くには、鏡を見ることが不可欠である。古来よりの考え方からすると自画像を描くことは、自らが自らの魂（精神）をキャンバスに写し取る行為であると言える。

しかし鏡像は反転して映し出されるため、別の側面をもった自我が、もう一人の自分として映し出されると考えることもできる。このようなもう一人の自分の現れを私は「ドッペルゲンガー」と捉え、自画像を描く意味を更に別の視点から追究していく。

第3章では、私にとって重要な考え方となった「ドッペルゲンガー」を産み出す定義をオットー・ランクの解釈を基に、ドストエフスキーの小説『二重人格』とステューヴンソンの小説『ジークル博士とハイド氏』を絡めながら導き出した。つまり「ドッペルゲンガー」を産み出す要因は、単純な心的分裂のみではなく、過大な罪の意識や、自己喪失（死）の恐怖に対する、自己愛に基づいた過度に強い自己保存・自己救済の欲求によって生まれるということである。更にはプロレスラー・タイガーマスク、レンブラントとシーレの《自画像》をドッペルゲンガーとして再解釈することによって、様々なドッペルゲンガーの現れ方について考察する。

第1章から第3章において私は、苦悩を乗り越える術を探してきた。しかしその過程で、私の求める本質とは、単なる力の象徴ではないことに気が付いた。

それぞれの作品に内在する、苦悩を乗り越えた姿ではなく、苦悩を乗り越えようとしている姿にこそ感動し、自身の作品もそうありたいと考えていたことに気が付いたのである。

このことを踏まえて私の作品を見てみると、理想像として描き出していたはずの自画像には、苦悩を乗り越えようとして乗り越えられない、現実の弱い自己も描き出されていたことが見えてきた。

第4章では、私自身の理想と現実とを抉り出し、これまでいかにして表現してきたのか、これからいかにして表現してゆくべきなのか考察してゆく。

私はドッペルゲンガーに現実を超越した筋肉を纏わせ、力強さを強調させるための大きな手を加えることによって、理想的な自分をキャンバスに表現してきたつもりでいた。

しかし人物の不安げな表情や自らの内部に屈みこんだ姿勢、暗めの色調、画面の切り方などによって、現実を抱えている苦悩の重さをも同時に表現していたことに気が付いた。それは意図的に表現した部分もあれば結果的に滲み出てきた部分もある。

けっきょく私の自画像は、私の裡にある精神の複雑さ―二重性を作品によって表現していると言えるのである。

今後は理想と現実の狭間で右往左往している自身の複雑さを絵の中で表現し続けていくとともに、力を失って愕然としている自分、憔悴している自分をも直視していくような作品をも制作してゆきたい。

## 審 査 結 果 の 要 旨

松村浩之君の学位論文のテーマは「人体表現と自画像～理想と現実あるいは苦悩の彫刻」である。彼が制作する作品は自画像を基本とし、しかも本人よりもたくましい筋肉を有する人体として描写される。その自画像がひとりだけではなく、3人あるいは4人と複数で画面に表わされることが多い。この論文のタイトルからも、松村君の作品の内容に密接に関わるものであることはもちろん、何故このような作品を制作せざるを得ないのか、自らの存在意義とは何かを根本から問い直さざるを得ない状況にある、あるいはあったことが分かる。その切実さは過去に本学の助手を務め、また独立美術協会の会員であるにもかかわらず、このテーマを追究せざるを得なかったのだということがわかる。

何故筋肉隆々の自画像を描く必然性があるのかを自問するところからこの論文は始まる。彼にとって憧れの的であったヒーローたち、それは「北斗の拳」のケンシローであったり、アニメのタイガーマスクや実在のプロレスラー佐山悟が名乗ったタイガーマスクであったりする。このヒーローたちはいずれも人間離れのした筋骨たくましい肉体を誇る。松村君はそこにある共通性を見出した。

彼らはいずれも何らかの意味で精神的な苦悩を抱えており、その苦悩を克服するためには筋肉を必要とする肉体の力と精神力を必要とすることであった。松村君個人もある精神的苦悩を抱えており、それを克服したいという願望を若年の頃から抱いてきた。彼の気持ちを鼓舞してくれたのがヒーローたちであり、いつしか鍛え上げられた筋肉すなわち肉体的力は精神力と同義であると感じられるようになった。

筋肉を備えた肉体美と精神力との関係から必然的に古代ギリシア彫刻が想起され、古典的美学の定石である「真善美」の問題に松村君は直面した。しかし彼が着目したのはその三者の関係に変化を来すヘレニズム期の「ラオコオン像」である。整然としたバランスが崩れ、理性よりも苦痛や苦悩という感情表出に重きを置き、そこから導き出される筋肉表現との関係である。ラオコオンに見られる苦痛こそ、極めて人間的なものであり、理想と現実の狭間で常に揺れ動き、苦悩せざるを得ない人間存在の本質がそこにあるという確信を得た。

この確信を論証するために、松村君はラオコオン像、ミケランジェロの奴隷像、ロダンの《考える人》といった具合に、ラオコオン像に直結する系譜をたどり、苦悩、難関、試練に立ち向かう人間の精神的葛藤と筋肉表現との関係について、すなわち、何かに打ち勝つ精神的力に付随する筋肉表現について考察した。彼の論文にはそれを実証するために十分な客観的な論拠が取り上げられている。

もうひとつの課題として彼が取り上げたのは、苦悩を抱えた画家たちの自画像の表現である。古今東西自画像を制作した画家は数多くいるが、松村君は特に自らの苦悩に直面しそれを受容し、生き抜いた画家の自画像だけに着目した。この選択基準は彼にとっても、彼の論文にとっても有意義な価値基準であり、それによって論点が一挙に絞られてきた。

彼が取り上げた画家はレンブラント、エゴン・シーレである。栄華を極めながらも転落の道を歩んだレンブラントは、諦観と寛容が混交した強い精神力を示した。彼は松村君にとって上述のヒーローとは違った意味だった。エゴン・シーレはどんな苦境にあっても自分自身の存在の意義を探るために、本質となるもの以外のすべてをそぎ落とし、裸の存在を極めつくそうとする気概を示し得た画家である。シーレほど自分を裸にし、あらゆる言い訳を捨ててさらけ出して見せる人間がどれだけいるかは別としても、シーレを取り上げるからには松村君自身の切実な問題を直視するという覚悟の程が見受けられる。

自画像を描くということは徹底した自己分析を伴う。それは自分を客観的対象として観察し続けることである。客観的な冷めた自分の存在がいなければ実現しえない自己との対話である。その関係がさらに複雑になって、幾つもの自分が現れてしまうことがある。松村君本人も論文で言及しているように、その複数性は自己省察の複雑さの故である。したがって解離性同一性障害とは異なる。その複数性は彼が抱える弱さに対峙する自分の反応の複雑さの反映であるといえる。

最終章でようやく自作についての考察へといたる。本来ならば、自分の作品について思いつき語りたいところであろうが、ここに至るまでの省察に相当なエネルギーを費やしてしまっていることは致し方ないとはいえ、この部分が本論文の醍醐味となる部分である。自作については今後、画家として語らざるを得ない機会が多々あると思われるので、今後に期待したい。

全体として、幾つもの文献に当たり、思索し、客観的に論理を展開をすることができ、松村君が何故作品を制作しなければならないのか、何故筋肉隆々の自画像でなければならないのかという問題を正面切って突き詰め、今後の制作における指針を見出せたことは高い評価を得るにふさわしい内容の論文である。したがって、松村浩之君は多摩美術大学博士後期課程において博士号を取得するに十分な学生であると判断する。